

平成 23 年度

病害虫発生予報第 4 号

平成 23 年 7 月 21 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ <http://www.mate.pref.mie.lg.jp/boiyosyo/>

目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠	7
4. 予察項目の見方	13
5. 今月のトピックス(チャノココクモンハマキ、チャハマキについて)	14
6. 気象のデータ	15
7. おしらせ	17

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、斑点米カメムシ類の発生量は多と予想されますので、穂揃い期の薬剤散布を行い、多発圃場では追加防除を実施してください。穂いもちおよび白葉枯病の発生量はやや多と予想されます。穂いもちは発生状況に応じて、また、白葉枯病は台風遭遇直後に、それぞれ薬剤散布してください。トビイロウンカの発生量は平年並、紋枯病、イネクロカメムシ、ツマグロヨコバイ、セジロウンカの発生量はやや少と予想されます。

ダイズでは、吸実性カメムシ類の発生量はやや多と予想されますので、発生状況に注意してください。紫斑病の発生量は平年並、コガネムシ類およびハスモンヨトウの発生量はやや少と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、黒点病、かいよう病（中晩柑）、チャノキイロアザミウマの発生はやや多と予想されます。黒点病では、降雨の状況に注意し、伝染源となる枯枝を除去してください。かいよう病では、伝染源となる発病葉及び発病枝は除去して、圃場外で処分してください。また、天候（風雨）

に注意し、適切に薬剤防除をしてください。チャノキイロアザミウマでは、果実への寄生状況に注意して、防除を実施してください。かいよう病（温州みかん）の発生量は平年並、ミカンハダニの発生量はやや少と予想されます。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量は少と予想されます。

3) 茶

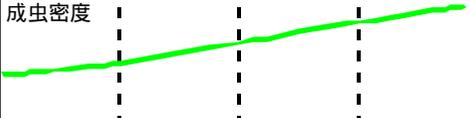
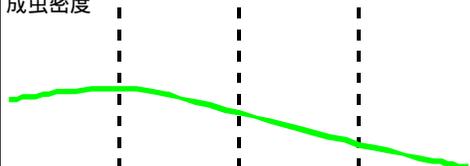
チャでは、炭疽病の発生量はやや多と予想されます。刈り遅れや病斑葉の多いところでは三番茶の 1 葉期に防除が必要です。チャノココクモンハマキの発生量は平年並、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマの発生量はやや少、カンザワハダニの発生量は少と予想されます。

4) 野菜

イチゴでは、炭疽病の発生量はやや多と予想されます。薬剤散布は株元まで十分かかるように行い、葉かき後の定期的な防除と降雨後の防除を徹底してください。

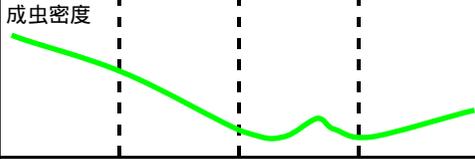
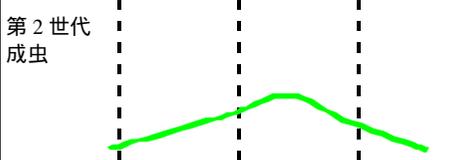
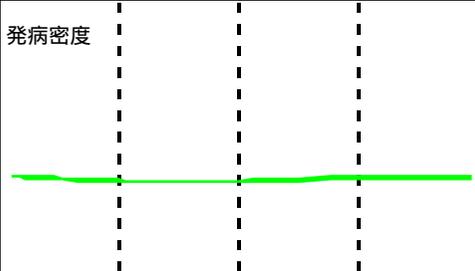
2. 作物別の状況

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生病消長の一例				防除の注意事項
						7月		8月		
						下旬	中旬	下旬	中旬	
イネ	穂いもち	-	やや多	大	高		<ol style="list-style-type: none"> 1) 穂ばらみ期から穂揃い期の予防散布が重要です。 2) 多発圃場では、使用時期に注意して追加防除を行いましょう。 			
	紋枯病	-	やや少	中	低		<ol style="list-style-type: none"> 1) 前年、発生の多かった圃場では注意してください。 2) 多肥、過繁茂の圃場では発生しやすくなります。 			
	白葉枯病	-	やや多	小	低		<ol style="list-style-type: none"> 1) 常発地では、台風の影響直後に薬剤散布してください。 2) 「みえのゆめ」は弱い品種なので注意が必要です。 			
	斑点米カメムシ類	-	多	大	高		<ol style="list-style-type: none"> 1) 病害虫発生予察注意報第1号(7月14日発表)。 2) 薬剤防除は穂揃い期に散布しましょう。広域での一斉防除が効果的です。 3) 例年、被害の多い地域では、穂揃い期とその7~10日後の2回散布を実施してください。 4) 周辺圃場よりも出穂が早い圃場では、被害が集中する可能性があるため注意しましょう。 			
	イネクロカメムシ	-	やや少	小	低		<ol style="list-style-type: none"> 1) 発生圃場では、これから出すくみ穂や白穂被害が目立つようになります。 2) 日中は株元に潜んでいるため、薬剤散布は株元までかかるように行ってください。 			

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
							下旬	上旬	中旬	
イネ	ツマグロヨコバイ	-	やや少	中	低	成虫密度				1) 9月上旬までに収穫する圃場では、実害はほとんどありません。
	セジロウンカ	-	やや少	小	低	成虫密度				1) 本年は多飛来がありません。
	トビイロウンカ	-	平年並	小	低	成虫密度				1) 本年は多飛来がありません。
ダイズ	紫斑病	-	平年並	小	普通	発病密度				1) これから播種する圃場では、種子消毒を徹底しましょう。 2) 莢が形成され始めたら薬剤散布してください。
	コガネムシ類	-	やや少	中	普通	成虫密度				1) 発生の見られない場合は、防除の必要はありません。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消の一例				防除の注意事項
			発生量	程度		7月	8月			
						発生量	下旬	中旬	下旬	
	ハスモンヨトウ	-	やや少	小	普通			被害量		<ul style="list-style-type: none"> 1) 白変葉を目印に早期発見に努め、若齢幼虫期に防除してください。 2) 発生量が急増することがありますので、防除所ホームページにおいて、フェロモントラップでの発生状況に注意してください。
	吸実性カメムシ類	-	やや多	中	普通			開花		<ul style="list-style-type: none"> 1) 薬剤散布は広域一斉防除が効果的です。 2) 開花終期から莢伸長期に防除してください。
カンキツ	黒点病	-	やや多	中	普通	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 薬剤散布を定期的実施し、8月下旬まで感染防止に努めてください。 2) 梅雨明け後は感染源となる枯枝が増加するので、切除に努めてください。 3) 薬剤散布後、積算で200mm以上の降雨があったら、次の防除を実施してください。
	かいよう病	-	温州 平年並 中晩柑 やや多	温州 小 中晩柑 中	温州 普通 中晩柑 高	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 現段階で果実・夏枝に病斑が見られる圃場では、発病した枝・葉・果実を除去し、早急に薬剤防除を行ってください。 2) 防風対策に努め、台風の接近が予想される場合には、直前に防除してください。 3) 高接樹や幼木については、ミカンハモグリガの防除も徹底してください。
	ミカンハダニ	-	やや少	中	普通	成ダニ密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 高温により活動が停滞する時期なので、1葉当りの寄生虫数を確認し、発生が少なければ当面防除の必要はありません。 2) 1葉当りの雌成虫寄生数が0.5~1.0頭程度を目安に防除してください。 3) 防除が必要な場合は、同一系統の薬剤の連用を避けてください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月		8月		
						下旬	下旬	中旬	下旬	
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	-	やや多	中	普通					1) 寄生果率 10% になった時を防除の目安にしてください。 2) 7月以降は、寄生部位が果頂部に移ります。
果樹共通	カメムシ類	-	少	小	低					1) 例年飛来が多く見られる圃場では、圃場内の観察をきめ細かく行ってください。 2) 樹園地（特にカンキツ、ナシ、カキ）には局所的に飛来してることがあります。昨年発生が多かった圃場周辺では、注意してください。 3) ナシ、ブドウの有袋栽培では、袋と果実が密着すると、袋の上から加害されることがあるので注意してください。
チャ	炭疽病	-	やや多	中	普通					1) 刈り遅れや旧葉の病斑が多い圃場では注意しましょう。 2) 新葉の1葉展開期に防除しましょう。 3) 整枝による病葉の刈り落としも防除効果があります。
	カンザワハダニ	-	少	小	低					1) 旧葉裏で多発が見られたら防除しましょう。 2) 薬剤抵抗性が発達しないようにローテーション散布しましょう。
	チャノミドリヒメヨコバイ	-	やや少	小	普通					1) 晴天が続くと発生が多くなります。 2) 三番茶の開葉初期に防除しましょう。 3) 一斉防除が効果的です。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
チャ	チャノキイロアザミウマ	-	やや少	小	普通	成虫密度 				<ul style="list-style-type: none"> 1) チャ以外にもイヌマキ、サクラ、果樹などでも発生します。 2) 開葉初期に防除しましょう。 3) 一斉防除が効果的です。 4) チャノミドリヒメヨコバイ、チャノホソガとの同時防除が可能です。
	チャノコカクモンハマキ	-	平年並	小	普通	第2世代成虫 				<ul style="list-style-type: none"> 1) 防除所ホームページにフェロモントラップ誘殺数を掲載していますので発生状況を確認してください。 2) 各世代の発生最盛期の10~14日後が防除適期です。 3) 整枝により幼虫発生を抑制することができます。 4) 交信攪乱剤、顆粒病ウイルス剤も利用できます。
イチゴ	炭疽病	-	やや多	中	普通	発病密度 				<ul style="list-style-type: none"> 1) 今後の高温期にかけて、葉かき後の定期的な防除と、降雨後の防除を徹底してください。 2) 薬剤散布は、株元まで十分かかるよう、畝やベンチの両側からも散布してください。 3) 罹病した株は、感染源にならないようすみやかに除去し、圃場外に持ち出して処分してください。 4) 灌水時の水滴の跳ね返りによって病原菌が広がります。灌水は、水滴が跳ね返らないよう丁寧に行ってください。

3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	穂いもち	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月15日発表)によると、気温は低くなく(-)、降水量は平年並または多い(+) 2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、葉いもちの発生圃場率 46.7%(平年 40.5%)とやや多、発病度 3.3(平年 5.0)と少、発病株における上位葉への進展率 3.8%(平年 2.3%)と多 3) 一般圃場では、葉いもち発生量は微~多(概してやや多)</p> <p>考察： 今後の気象条件、巡回調査結果および一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	紋枯病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月15日発表)によると、気温は低くない予想 2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率 2.8%(平年 10.7%)と少、被害株率 0.2%(平年 2.1%)と少 3) 一般圃場では、発生量は無~平年並(概して平年並)</p> <p>考察： 現状の発生量は少と考えられますが、今後の気象条件を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	白葉枯病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 7月18日以降、台風6号の通過による集中降雨に遭遇 2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率 0%(平年 0%)と平年並に少ない傾向 3) 一般圃場では、発生量は無~平年並(概して平年並)</p> <p>考察： 現状の発生量は少と考えられますが、台風の通過によって感染の機会があったと予想されるため、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	斑点米カメムシ類	-	多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(松阪市・4月第1半旬~7月第2半旬)では、誘殺数はアカスジカスミカメ 118頭(平年 24.4頭)と多、アカヒゲホソミドリカスミカメ 122頭(平年 43.9頭)と多 2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、畦畔イネ科雑草すくい取りによる発生地点率は、ホソハリカメムシ 38.1%(平年 23.2%)と多、クモヘリカメムシ 4.4%(平年 6.9%)と少、シラホシカメムシ類 10.6%(平年 10.8%)と平年並、アカスジカスミカメ 45.0%(平年 14.2%)と多。同調査における成幼虫数は、ホソハリカメムシ 1.3頭(平年 0.6頭)と多、クモヘリカメムシ 0.6頭(平年 0.5頭)とやや多、シラホシカメムシ類 0.15頭(平年 0.17頭)とやや少、アカスジカスミカメ 11.7頭(平年 0.9頭)と多 3) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概してやや多)</p> <p>考察： 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量は多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	イネクロカメムシ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～7月第2半旬）では、誘殺数は水田位置 11 頭（平年 12.3 頭）とやや少、畑位置 249 頭（平年 237.2 頭）と平年並（±）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率 22.3%（8年平均 20.6%）と平年並の傾向、被害株率 2.8%（8年平均 3.3%）とやや少の傾向（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概してやや少）（-）</p> <p>考察：巡回調査結果および一般圃場での発生状況を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯では、誘殺数は松阪市（4月第1半旬～7月第1半旬）水田位置で7頭（平年 15.5 頭）と少、同・畑位置で 2737 頭（4年平均 1990.8 頭）と多の傾向、伊賀市（5月第1半旬～7月第1半旬）で 226 頭（平年 33.8 頭）と多、紀北町（4月第1半旬～7月第1半旬）で 11 頭（平年 2.9 頭）と多、御浜町（4月第1半旬～7月第1半旬）で 8 頭（平年 1.5 頭）と多（+）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率 36.1%（平年 27.9%）と多、払い落とし成虫数 0.2 頭（平年 1.1 頭）と少、同幼虫数 1.7 頭（平年 3.1 頭）と少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>考察：巡回調査結果では少ない状況ですが、予察灯の状況を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	セジロウンカ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯では、誘殺数は松阪市（4月第1半旬～7月第1半旬）で 1 頭（平年 2.5 頭）と平年並、伊賀市（5月第1半旬～7月第1半旬）で 7 頭（平年 1.6 頭）と多、紀北町（4月第1半旬～7月第1半旬）で 39 頭（平年 10.7 頭）と多、御浜町（4月第1半旬～7月第1半旬）で 4 頭（平年 28.8 頭）とやや少（+）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、紀州での発生圃場率 0%（平年 49.6%）と少、払い落とし成虫数 0 頭（平年 2.4 頭）と少、県全体では発生圃場率 0.6%（平年 15.0%）と少、払い落とし成虫数 0.006 頭（平年 1.4 頭）と少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>4) 九州各県の病害虫防除所情報では、極多飛来は未確認（-）</p> <p>考察：巡回調査結果では少ない状況ですが、予察灯の状況から 6月第6半旬から 7月第1半旬にかけて飛来があったと予測されるため、予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	トビイロウンカ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯では、誘殺数は松阪市(4月第1半旬~7月第1半旬)で0頭(平年0.1頭)、伊賀市(5月第1半旬~7月第1半旬)で0頭(平年0頭)、紀北町(4月第1半旬~7月第1半旬)で0頭(平年0頭)、御浜町(4月第1半旬~7月第1半旬)で0頭(平年0頭)と平年並に少ない傾向(±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率0%(平年0.1%)と平年並に少ない傾向、払い落とし成虫数0頭(平年0.2頭)と平年並に少ない傾向(±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無~平年並(概して平年並)(±)</p> <p>4) 九州各県の病害虫防除所情報では、多飛来は未確認(-)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
ダイズ	紫斑病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場(昨年11月)では、紫斑粒発生率0.4%(平年0.5%)と平年並(±)</p> <p>考察: 昨年の発生状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	コガネムシ類	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(松阪市・4月第1半旬~7月第2半旬)では、誘殺数はドウガネブイブイ163頭(平年195.2頭)と少、ヒメコガネ30頭(平年62.8頭)と少(-)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月上旬~7月上旬)では、誘殺数はマメコガネ124頭(平年195.5頭)と少、ドウガネブイブイ49頭(平年44.4頭)とやや多、ヒメコガネ3頭(平年20.8頭)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無(±)</p> <p>考察: 予察灯およびフェロモントラップを重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ハスモンヨトウ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) フェロモントラップ(6月第3半旬~7月第2半旬)では、誘殺数は松阪市で224頭(平年291.6頭)とやや少、菰野町で182頭(5年平均209.4頭)とやや少の傾向、津市で297頭(4年平均320.3頭)とやや少の傾向(-)</p> <p>2) 一般圃場では、発生量は無(±)</p> <p>考察: フェロモントラップを重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	吸実性カメムシ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(松阪市・4月第1半旬~7月第2半旬)では、誘殺数はアオクサカメムシ30頭(平年66.5頭)とやや少、イチモンジカメムシ57頭(平年22.9頭)と多、クサギカメムシ8頭(平年64.2頭)と少(+)</p> <p>2) 近年ミナミアオカメムシは、伊賀地域と中山間地域を除くほぼ県全域で発生が確認されており、水稲巡回調査圃場(7月第2週)では、畦畔雑草において成幼虫の発生を確認(+)</p> <p>考察: 予察灯および畦畔雑草におけるミナミアオカメムシの発生状況から、予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	黒点病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月15日発表)によると、降水量は少なくない予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、果実発病度 32.6(平年 26.7)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、果実発病度は 1.8(平年 0.4)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概してやや多) (+)</p> <p>5) 感染源となる枯れ枝は平年並 (±)</p> <p>考察: 一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量はやや多と思われ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	かいよう病	-	温州 平年並 中晩柑 やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月15日発表)によると、気温は低くなく(-)、降水量は少なくない(+) 予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、発病葉率 0.9%(平年 12.3%)と少、発病果率 1.7%(平年 25.1%)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、温州みかんは発病葉率 0.6%(平年 0.7%、ただし5か年は0%)とやや多(+)、 発病果率 0%(平年 0.1%)と平年並(±)、中晩柑は発病葉率 16.0%(平年 11.5%)と多(+)、発病果率 2.0%(平 年 7.9%、ただし6か年は0%)とやや多(+)(温州±、中晩柑+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概してやや多) (+)</p> <p>考察: 現状の発生量は温州みかんは平年並、中晩柑類はやや多と思われ、引き続き予想発生量は温州みかんは平年 並、中晩柑はやや多と考えます。</p>
	ミカンハダニ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月15日発表)によると、気温は低くなく、降水量は少なくない予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、100葉当り寄生虫数は、無防除区で 2.2頭(平年 17.7頭)と少、慣行防除区で 1.1 頭(平年 3.7頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、新葉における寄生葉率は 6.3%(平年 9.4%)とやや少、寄生虫数は 0.18頭 /葉(平年 0.36頭/葉)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概してやや多) (+)</p> <p>考察: 現状の発生量は圃場によるばらつきがありますが平年並と思われ、今後の気象要因を考慮して、予想発生量 はやや少と考えます。</p>
	チャノキイロアザ ミウム	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃(7月上旬)では、粘着トラップへの誘殺数は 2.5頭/日(平年 2.8頭/日)と平年並 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、100果当り寄生虫数は 59.2頭(平年 7.0頭)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、被害果率は 0.2%(平年 1.3%、ただし6か年は0%)と平年並 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 現在の発生量は平年並と思われませんが、県予察圃での発生状況を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹 共通	カメムシ類	-	少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町:7月1日~7月10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ6頭(平年2,338頭)と少、ツヤアオカメムシ1頭(平年18頭)と少 (-)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:6月11日~7月10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ17頭(平年617頭)と少、ツヤアオカメムシ7頭(平年281頭)と少、クサギカメムシ7頭(平年62頭)と少 (-)</p> <p>3) フェロモントラップ(6月9日~7月8日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は山地(津市白山町川口)で227頭(平年863頭)と少、中間地(津市白山町二本木)で426頭(平年1,271頭)と少、平坦地(松阪市嬉野川北町)で4頭(平年267頭)と少 (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(7月第2週)では、圃場への飛来を未確認 (±)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量はやや少~少(概して少) (-)</p> <p>考察: 現状の発生量は少なく、予想発生量は少と考えます。</p>
	炭疽病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月15日発表)では、向こう1か月の気温は低くなく、降水量は少なくない予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、旧葉発病葉率は4.7%(9年平均3.8%)と多の傾向 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生は平年並と判断され、今後の気象要因を考慮して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	カンザワハダニ	-	少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月15日発表)では、向こう1か月の気温は低くなく、降水量は少なくない予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃(7月上旬)では、寄生葉率は4.0%(平年2.6%)とやや高、寄生頭数は0.10頭/枚(平年0.08頭/枚)とやや多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、寄生葉率は0.3%(平年1.2%)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察: 巡回調査結果及び一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生は少と判断され、大きな増加要因はないので、引き続き予想発生量は少と考えます。</p>
チャノミドリヒメヨコバイ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃(7月第1半旬~第2半旬)では、吸引粘着トラップ捕殺数は0頭(平年6.8頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、たたき落とし虫数は2.0頭(平年2.2頭)とやや少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察: 現状の発生はやや少と判断され、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>	

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノキイロアザミウマ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃(7月第1半旬~第2半旬)では、吸引粘着トラップ捕殺数は759頭(平年3471.1頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、たたき落とし虫数は8.4頭(平年24.5頭)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察: 一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生はやや少と判断され、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノコカクモンハマキ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃(7月第2半旬)では、フェロモントラップ誘殺数は18.0頭(平年8.2頭)と多 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、ハマキムシ類巻葉数は0.1枚/m²(平年0.4枚/m²)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生は平年並と判断され、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
イチゴ	炭疽病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月15日発表)によると、向こう1か月の降水量は少ない予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週、苗床)では、発病株率は0.3%(平年0.3%)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 現在の発生量は平年並と思われ、今後の気象要因を考慮して、予想発生量はやや多と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期（平年比）： 平年の発生月日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数	-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	1	2	3	4	5	6
評価	早	やや早		平年並				やや遅		遅			

発生量（平年比）： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並	やや多	多	

発生量（程度）： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量（平年比）」と比べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よ

りやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率（平年比）： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除をしていればよいと予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要な圃場の割合が相当増加すると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか防除しなくても済むような圃場の割合が相当増加すると予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量（平年日）の予察根拠」の見方

（±）：平年並の要因

（+）：発生量増加または発生時期遅延の要因

（-）：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス「チャノコカクモンハマキ、チャハマキについて」

1) どんな虫

チャの重要害虫のひとつに葉を綴って食害するハマキムシ類がいます。ハマキムシ類にはチャノコカクモンハマキ、チャハマキの2種類があり、三重県を含む西日本ではチャノコカクモンハマキが多く、東日本ではチャハマキが多くいます。チャノコカクモンハマキは成虫が吊鐘型をした蛾で、前翅の長さが7~9mm、翅に黒褐色の紋があり、この模様は雄の方が明瞭です(写真1)。終齢幼虫の体長は約18mm、頭部は淡褐色です。チャハマキは成幼虫ともにチャノコカクモンハマキより大型です。成虫の前翅の長さは10~15mm、翅の模様は不明瞭です(写真2)。終齢幼虫の体長は30mmに達するものもあり、頭部が黒褐色であるところがチャノコカクモンハマキと違います。

2) 生態と被害

両種とも幼虫で越冬します。チャノコカクモンハマキの越冬幼虫は4月~5月に羽化し、年間4~5世代発生します(図1)。孵化幼虫は新芽や若葉を食害します。成長すると1枚の葉を縦に綴ったり(写真1)、2~3枚の葉を綴り合わせて食害しますが、発生初期は被害が目立たないので注意が必要です。チャハマキの越冬世代は4月から羽化し、年間4世代発生しますが、各世代のピークははっきりしません(図1)。幼虫は成熟した葉を好み、数枚の葉を綴り合わせて食害します(写真2)。

3) 防除対策

孵化~2齢幼虫期が防除適期で、これはフェロモントラップ誘殺数のピークを過ぎて10~14日後ごろに当たります。病害虫防除所ホームページに発生消長のグラフを掲載しているので、参考にしてください。一番茶期は越冬世代の羽化時期のため防除の必要ありません。一番茶期摘採後、三

番茶硬化期頃の防除が重要です。

脱皮阻害剤、交信攪乱剤に対する抵抗性出現が報告されており、薬剤抵抗性が発達しないように同一薬剤の連用をさけるようにしましょう。

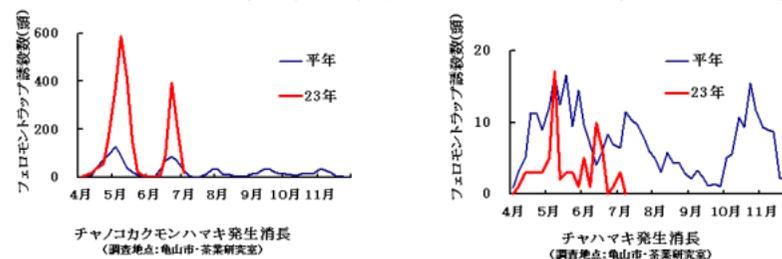


図1. チャノコカクモンハマキとチャハマキの発生消長



写真1. チャノコカクモンハマキ幼虫による被害状況(左、松阪地域農業改良普及センター原図)と雄成虫(右)



写真2. チャハマキ幼虫による被害状況(左、松阪地域農業改良普及センター原図)と雄成虫(右、農業研究所原図)。

6. 気象のデータ

東海地方 1 か月予報 (平成 23 年 7 月 15 日 名古屋地方気象台発表)

東海地方の向こう 1 か月は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。2 週目を中心に寒気の影響を受け、雷雨となる時期がある見込みです。

1 週目 7 月 16 日 ~ 22 日	期間のはじめは高気圧に覆われて概ね晴れますが、その後は暖かく湿った気流の影響で雲が広がり、中頃は雨が降るでしょう。	津の降水日数・晴れ日数の平年値 2.5 日・3.8 日
2 週目 7 月 23 日 ~ 7 月 29 日	平年と同様に高気圧に覆われて晴れの日が多いでしょう。寒気の影響を受ける時期がある見込みです。	同 2.1 日・4.5 日
3~4 週目 7 月 30 日 ~ 8 月 12 日	平年と同様に高気圧に覆われて晴れの日が多いでしょう。雷雨の発生しやすい時期がある見込みです。	同 3.9 日・9.5 日

東海地方週間天気予報 (平成 23 年 7 月 20 日 10 時 35 分 名古屋地方気象台発表)

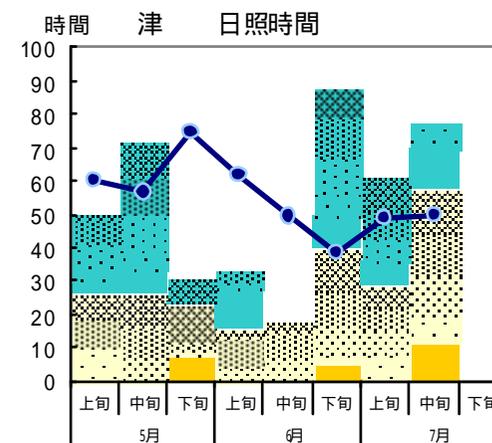
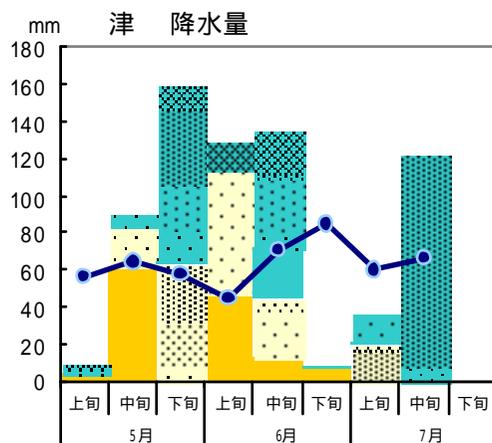
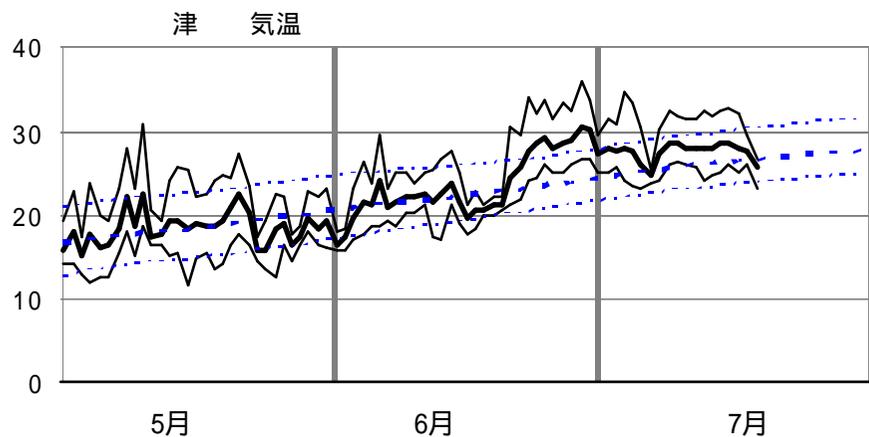
予報期間 7 月 21 日 ~ 7 月 27 日

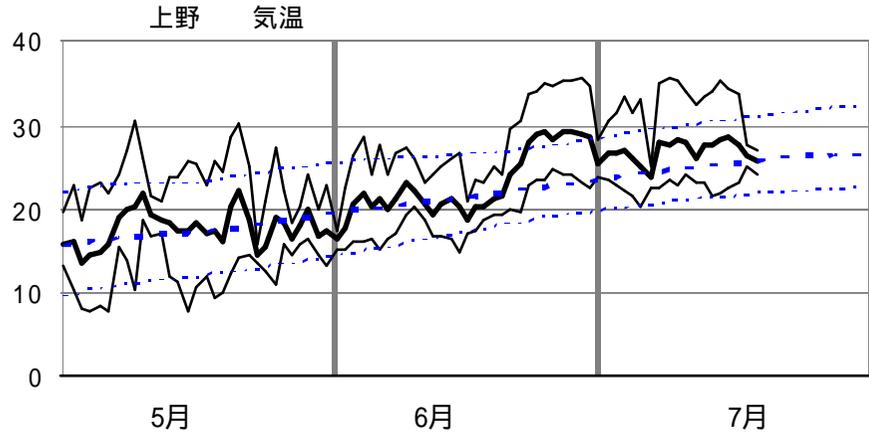
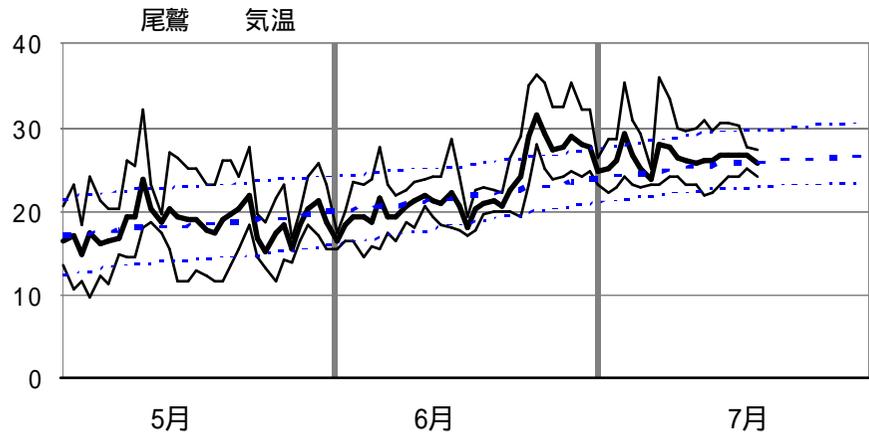
向こう一週間は、21 日は高気圧に覆われて晴れますが、その後は暖かく湿った気流や寒気の影響で雲が広がりやすいでしょう。

最高気温と最低気温はともに、平年並か平年より高い見込みです。

降水量は平年より少ないでしょう。

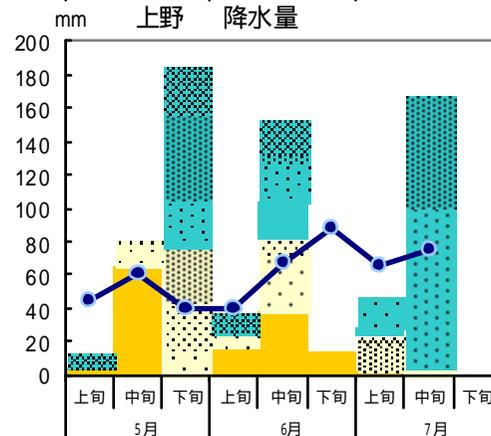
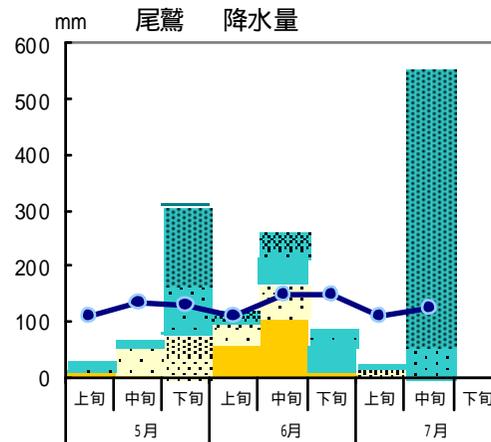
気象の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etm/index.php> から作成、5 月 18 日に平年値が変更されました) (7 月 19 日まで)





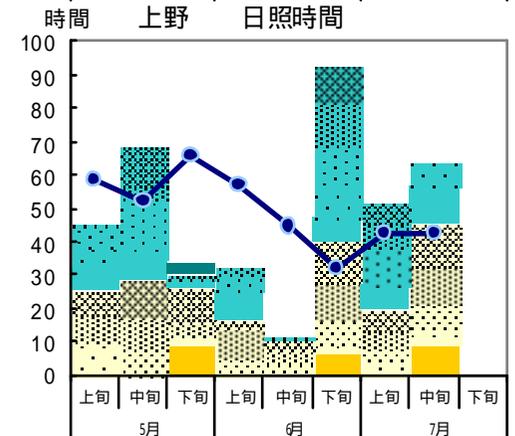
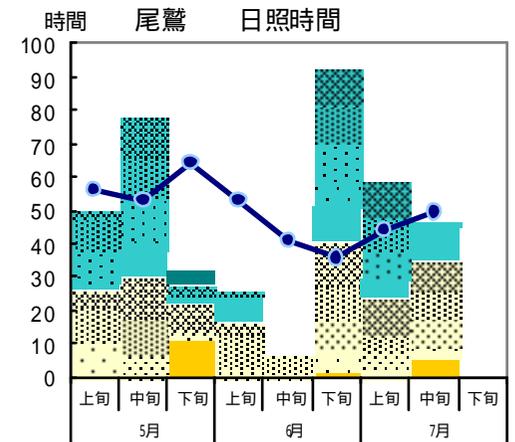
凡例

- 平均
- 最高
- 最低
- 年平均
- 平年最高
- 平年最低



凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平年値



凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平年値

7. お知らせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

- 第1回 4月21日(済み) 第2回 5月26日(済み)
- 第3回 6月23日(済み) 第4回 7月21日(今回)
- 第5回 8月18日(木) 第6回 10月20日(木)
- 第7回 3月22日(木)

3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアドレスからお入りください。

http://www.mate.pref.mie.lg.jp/Bojyosyo/files/h23yohotebiki_.pdf

5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

7) 気象データの平年値

気象データの平年値が5月18日に更新され、1981年～2010年の30年間の平均値に変わりました。今回の変更により、全国的に平均気温が0.2～0.4程度高くなりました。